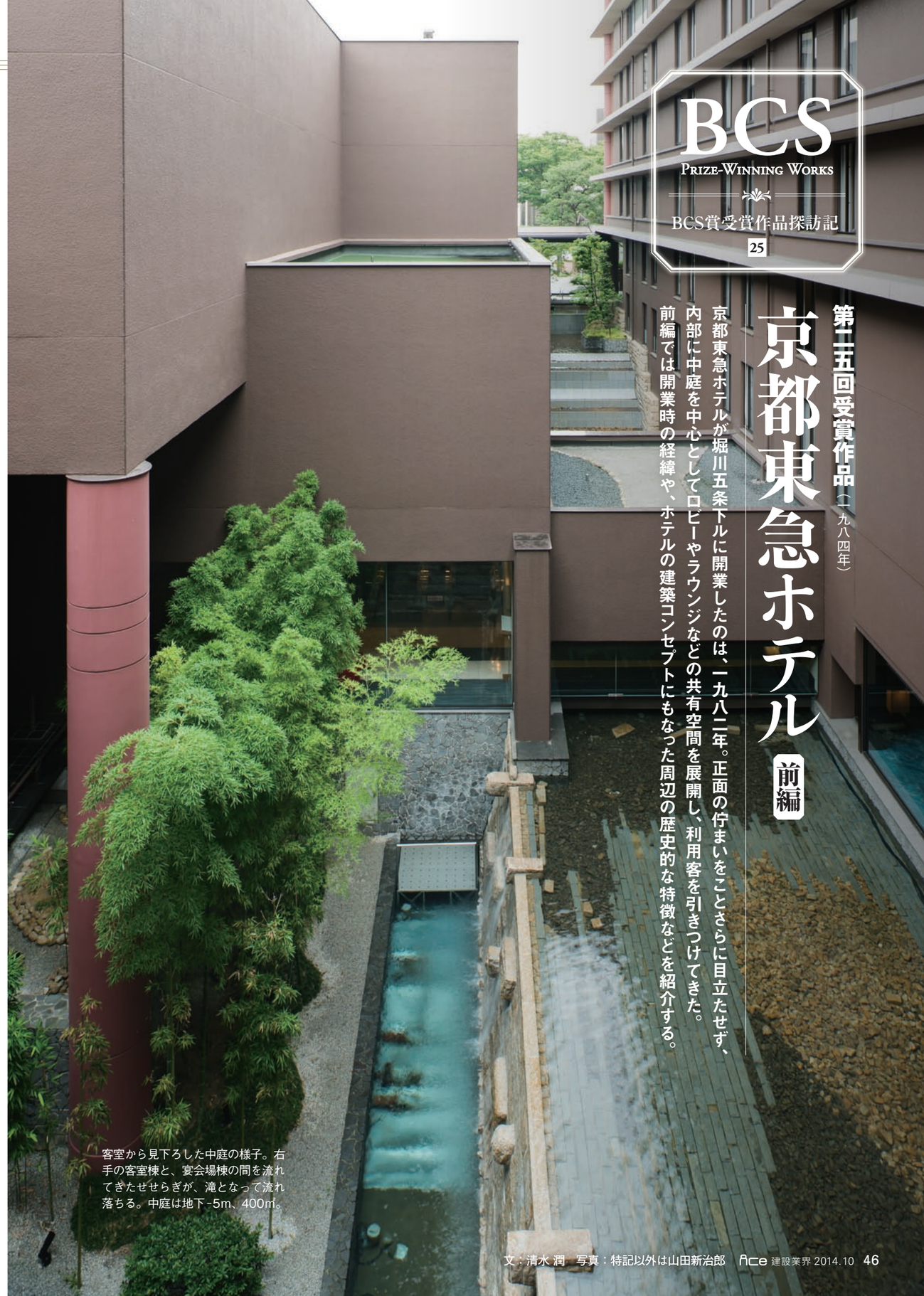
BCS
PRIZE-WINNING WORKS
BCS賞受賞作品探訪記
25

第二五回受賞作品（一九八四年）

京都東急ホテル 前編

京都東急ホテルが堀川五条下ルに開業したのは、一九八二年。正面の佇まいをことさらに目立たせず、内部に中庭を中心としてロビーやラウンジなどの共有空間を展開し、利用客を引きつけてきた。前編では開業時の経緯や、ホテルの建築コンセプトにもなった周辺の歴史的な特徴などを紹介する。



客室から見下ろした中庭の様子。右手の客室棟と、宴会場棟の間を流れてきたせせらぎが、滝となって流れ落ちる。中庭は地下-5m、400㎡。

文：清水 潤　写真：特記以外は山田新治郎

全国展開のなかで、国際的観光都市に参入

京都東急ホテルは京都市内を南北に伸びる大通りの一つ、堀川通と、東西に走る五条通が交差する南西側の敷地に建っている。四条通の東側などを中心とする繁華街とは少し距離を置く界隈だが、この敷地の南側には西本願寺の寺域が広がり、一方、堀川通を北上すれば左手に二条城の濠や櫓が姿を現すなど、存在感をもつ史跡を辿ることができる。同ホテルは一九八二（昭和五十七）年、東京急行電鉄のグループ会社・東急ホテルチェーン（現・東急ホテルズ）によって設立された。東急ホテルチェーンは東京都内に銀座東急ホテルをはじめ、いくつかのシティホテルを運営していたが、昭和五十年代に全国展開を図り、毎年のように仙台、名古屋、大阪、鹿児島などの主要都市にホテルを開業していった。京都もその一つだった。開業当時、東京から管理部門のスタッフとして着任した浦田三四郎氏が当時を振り返る。「もともと五条通を挟んだ堀川通の一帯は、室町時代から本圀寺（ほんこくじ）という大きなお寺が建っていた場所でしたが、一九七一（昭和四十六）年の山科移転に伴い売却されました。ちょうど京都に出店を考えていた当社は戸田建設さんの協力のもとこの地を取得し、戸田建設さんの設計施工で建てることとなりました」。

敷地面積は約七、二四四平方㍍、延べ床面積は約三〇、六〇〇平方㍍、建物の規模は地上七階、地下二階。客室数は四三七室を数える。「当時の京都で三～四〇〇室を超えるホテルは五つぐらいだったと思います。外資系のホテルもまだありませんでした」と語るのは、営業部門のオープニングスタッフだった栗本政幸氏。関西系資本の旅館、ホテルが大半を占める中へ、東京の資本が本格参入していく先駆けだった。

上／竣工当時の外観。正面はエントランスと車寄せがある宴会場棟。左手が客室棟。（提供：戸田建設㈱）
下／現在の客室。7階のスイートルームから堀川通りを見晴らすことができる。

豊かな湧水を導いた中庭が利用客を魅了する

京都東急ホテルを訪れると、意外な光景が展開していくのに驚かされる。正面の外観は穏やかなアースカラーのタイル張り。控えめな構えのエントランスを入ると、右手は宴会場へ向かい、左手はホールの向こうが吹き抜けており、下りエスカレーターで地下一階へ導かれていく。このホテルは建築の高さ制限の中で客室数を確保する条件を逆手に取って設計され、フロントロビーをはじめとするメインフロアが地下一階に設けられているのが特徴である。エスカレーターの突当りにはピクチャーウィンドーが設けられ、豊富な水量のせせらぎが滝となって石の壁を流れ落ちていく様子が目に入ってくる。そこには空に向かって開かれた中庭が設けられているのだった。緑の竹林が風にゆらめき、陶板を張ったテラスも設置されている。

この中庭の周りをフロントロビー、ラウンジやレストラン、バーカウンターなどの共有空間が取り巻いており、移動していくに従って、それぞれの場所から中庭の異なる表情を眺めたり、あるいは中庭越しに向かい合う場所の様子を目にすることができる。これらの見せ方も窓の高さを抑えることで、風景が美しく切り取られ、眺めていると気持ちがやすらいでいく。

堀川の流れを再現する

中庭で滝となって落ちる水流は、中庭だけで循環しているわけではなく、じつはホテル正面のエントランスの左手から湧き出し、車寄せの辺りから段状のせせらぎとなり、客室棟との間を中庭に向かって、内部のエスカレーターの動きに並行して降りていく。水の路が開かれることで自然のなかに建物が溶け込んでいるような開放感をもたらしている。この水の流れは、ホテルが面する堀川通の名のとおり、かつて通り沿いに流れていた堀川からイメージされた。堀川は鴨川に並び平安時代に遡る歴史をもっている。ホテルの建設が決まった頃、道路際に水路がまだ存在していたが、すでに水はなく、暗渠として埋められることが決定していた。そこで、消えゆく堀川を惜しみ、流れの再現が設計コンセプトの軸の一つに据えられたという（後編参照）。さらに栗本氏が周辺の歴史について語ってくれた。「京都は水が豊富な土地柄ですが、調べていくと、この近隣に湧き出る水は京都の中でも名水といわれていた記録が出てきます」。数々の名水の井戸があるなかで、左女牛井と呼ばれる井戸はとくに有名で、ホテルの南側には左女牛井跡の石碑が立てられている。元は源氏の居館・六条堀川邸内に水を引き込んだ井戸とされ、また室町時代には茶の湯の創始者といわれる村田珠光がこの井戸の水を求めて屋敷を構えたと言われる。以降、茶の世界では名水の代名詞となっている。

右／せせらぎは宴会場棟（右）と客室棟（左）の間の水路を中庭に向けて流れ落ちていく。
左／エントランスの左手から水が湧き、せせらぎとなる。

上／中庭に面している地下1階のフロントロビー。天井や開口部の高さが低く抑えられ、中庭の風景が目前に広がる。絨毯や仕上げの配色はインテリアのトレンドに合わせて変更しているが、基本的な空間構成は竣工当時から大切に引き継がれている。
下／竣工当時のフロントロビー。（提供：戸田建設㈱）

こうした名水の水脈は現在も地下深く流れている。地下八〇メートルから汲み上げる地下水を開業時は中庭への給水を中心に使っていたが、二〇〇三年に設備を整え、ホテル全体が使う水の約九五%を地下水に切り替えた。全客室の飲料水やシャワー、レストランなど、サービスに使われる水全てに地下水が使われ、好評を博している。

トレンドを取り入れつつ、空間構成は変えない

三二年間営業を続けるなかで、変わるものと変わらないものがある。時代の流れに合わせてチャペルを設けたり、デザイントレンドやメンテナンスの一環としてインテリアを改装してきたが、ドラマチックな空間構成は開業当時から現在まで変わっていない。「町家など、京都の伝統的な建物のように、間口が狭くて、奥に行くに従って広がりが感じられることがお客様に喜ばれています」と語るのは、管理支配人の岡埜隆至氏。近年は中庭のオープンテラスで挙式を行うプランも設けられている。来年はレストランとバーの大幅な模様替えが予定されているが、いずれも中庭との関係をより意識し、京都東急ホテルならではの特徴を生かし続けるという。

1996年、1階の客室を改修してチャペルが設けられた。開業当初は神前結婚式が主流の時代だったため、チャペルは宴会場に仮設していた。（提供：京都東急ホテル）

建築主より

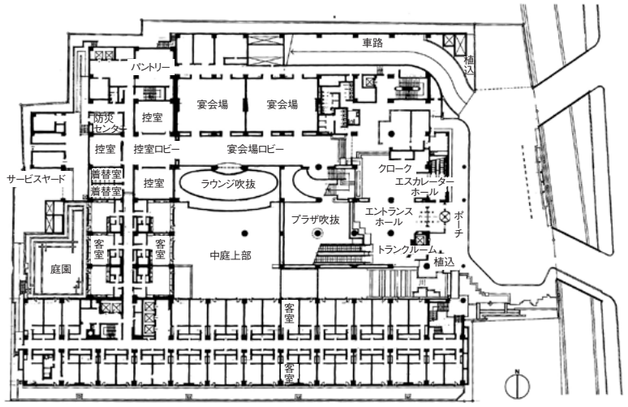
建物の魅力はホテルの財産 中庭には京都の四季があります

京都東急ホテル 管理支配人
岡埜隆至 *Takashi Okano*

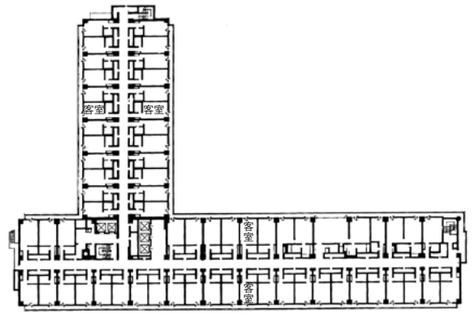
私は京都入社で、管理部門の仕事に携わって二六年になります。まず、お客様に積極的にビーアールできることの一つは、建物が大きな魅力をもっていることです。水の流れとともに、中庭が建物の中心にあり、フロントロビーやラウンジから見通したときの雰囲気は、とてもいいものです。私自身もラウンジで打ち合わせなどをしているときに、フロントスタッフがお客様をお迎えしている様子が目に入る感じがとても気に入っています。

中庭は屋外につくられているので、風景が季節ごとに移り変わり、京都の四季を楽しむことができるんです。雨も降りますし、雪も降ります。以前、中庭にクリスマスツリーを立てた時に、キジバトがやってきて巣をつくったこともありました。中庭は北向きと東向きの客室からも見下ろすことができますので、リピーターのお客様は、眺めがいい部屋を予約したいとおっしゃいます。

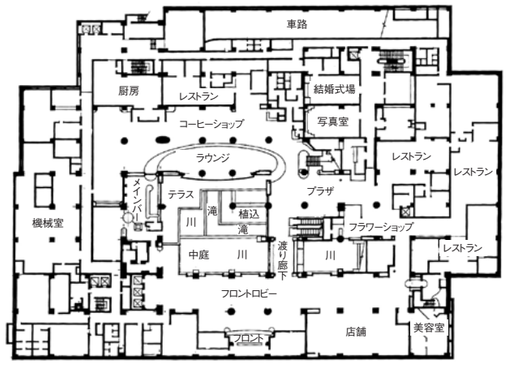
このホテルの開業以来、京都に根差した魅力をお客様に提供していこうという考えは、変わっていません。先輩方から私たちに伝えられ、受け継がれてきました。私たちは初めてお見えになるお客様に、私どものホテルのよさを感じていただけるように、建物を活かしながら、今後も工夫をしていきたいと思います。そうした意識を、若いスタッフに引き継いでいくことも私の仕事です。



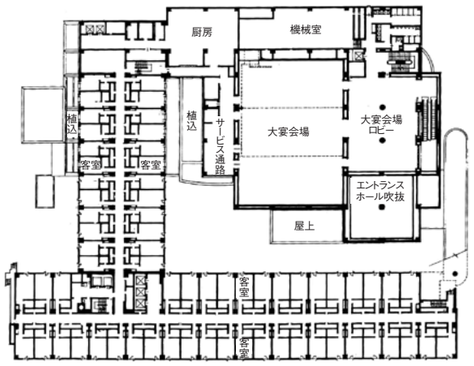
1階平面図



基準階（客室）平面図



地下1階平面図



2階平面図

京都東急ホテル

JR京都駅より　市バス：「堀川五条」下車徒歩約3分
　　市営地下鉄：烏丸線「五条」駅下車（4番出口）徒歩約8分

計画概要

所在地：京都府京都市下京区五条堀川下ル柿本町580
建築主：株式会社東急ホテルチェーン
設計者：戸田建設株式会社
施工者：戸田建設株式会社
竣　工：1982年10月
敷地面積：2,239㎡
建築面積：895㎡
延床面積：6,097㎡
構　造：SRC造、一部RC造
規　模：地下2階　地上7階　塔屋1階

※社名等は受賞当時のもの